



TITLE:

他律性から自発性へ：試みと挫折の
ジレンマを越えられない壁は何か
(<第10回大学教育改革フォーラム
>話題提供2)

AUTHOR(S):

近藤, 隆久

CITATION:

近藤, 隆久. 他律性から自発性へ：試みと挫折のジレンマを越えられない壁は何か(<第10回大学教育改革フォーラム>話題提供2). 京都大学高等教育研究 2004, 10: 113-116

ISSUE DATE:

2004-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54140>

RIGHT:

話題提供 2 「他律性から自発性へ — 試みと挫折のジレンマを越えられない壁は何か —

遠 藤 隆 久（熊本学園大学商学部教授）

（遠藤） こんにちは。熊本学園大学の遠藤と申します。レジュメをそのままお話ししても面白くないので、それを補う形でお話ししたいと思います。今回このような場を与えていただき、私の役割とは何だろうといろいろ考えてみました。このプログラムに、「COL への申請に向けて個別大学学内で自分たちの教育状況について、真剣な討論がなされたり、これまではあまり目立たなかった日常的な努力が取り上げられ日の目をみたりしました。しかし他方では、外向けにアピールしやすい仕事だけが脚光を浴びて、大部分の大切な、しかし地道すぎる日常的な努力がますます日陰に追いやられるといった惨めな結果もあります」とあります。ここのところが私の役割ではないかと思っております。

大学の自発性の在り方について、私なりの経験から、私の大学の中だけに決してとどまらない、大学自身が抱えている普遍的な問題があるのではないかと感じているというお話をしたいと思います。

昨年こちらのセンターで出版された『大学教育学』という非常に優れた本があります。この本を拝見したときに、私が日常的な教育活動や、大学の中でいろいろな活動をしてきたことをこのような形で理論化していただけることに對して、大変敬意を感じました。また、この本に出会って私なりに自分のやってきたことが整理できたり、自分の課題が発見できたり致しました。

ただ、この本の中で田中先生が、「自分の教育実践に向き合う際、大学教育の研究者と他の同僚との間で、技量や技能の上でさほど大きな差があるとは思えない。かりに違いがあるとしても、それはたかだか教育実践についての反省の頻度が相対的に多いという程度のことであるにすぎないであろう」と書かれています。教員と組織に対する極めて楽観主義的な発想で、私の日常経験ではどうもそこまで楽観的に成れないというのが実感です。しかし、他方で北海道から九州までこれだけたくさんの先生方がこの場にお見えになっているということは、逆に田中先生のおっしゃっていることが正しいのかなど、思わないでもありません。皆さんが各大学に戻られて、点が線になり、線が面になって、大学全体が本当にそのような方向に向かっているのかどうか。それをどのようにお考えになっているかということを考えてみたいと思います。

最初に私自身の問題提起からお話し致します。平成3年に大学設置基準の大綱化が始まって以来、大学評価やシラバス、FD、任期制、その他いろいろな制度が文科省主導で次から次へと導入されてきました。これに対して各大学は、それを本当に自らの自発性に転化してきたのかというと、絹川先生もおっしゃったように、一例を挙げると大学評価は自己評価を作ることが目的に留まって、その結果、何かを改善しようという努力が本当になされたのでしょうか。

シラバスというのは、本来は教員と学生が授業の場で相互に協働するためのものです。基本的に、シラバスで教員はこのようなことを教えたいのだというメッセージを示し、学生はそれを読んで積極的に学びにくるための手段であるはずですが。本当に我が国の大学で、学生がそのようにシラバスを読んで授業に来ているのでしょうか。そして、そのシラバスを通して、学生と教員が授業前に一定のコンセンサスがあって、授業が始まっているのでしょうか。わが国の実態は、そうしたのではなく教員の授業管理のために導入されているのではないのでしょうか。

FDでも、実際に参加する必要のない先生が参加して、参加すべき先生が来ないのです。つまり、一生懸命授業努力している先生方がやってこられるのです。この先生方は自分たちで一生懸命授業努力をされていますから、私たちとしてはこの先生は来なくてもいい。むしろ授業努力をしていない先生を引っ張り出したいわけです。しかし、この先生方はFDという自発的な教育研究の場には絶対に現れません。どれほど「来てください」と呼びかけても来ないというのが現実です。

では、なぜ我々の大学は自発性を持ちえなかったのでしょうか。これはもっとさかのぼって考えると、戦後の日本の大学が大学大衆化、いわゆるアメリカ型の大学像に向かったときに、アメリカ型の大学が目指したアンダーグラデュ

エートスクールとしての在り方、すなわちリベラルアーツという基本的な哲学が本来はあったはずですが。私たちは、本当にその哲学を内実化していく努力をしてきたのでしょうか。実は教育と研究の分離や、一般教育と専門教育とは違うといった議論は、少なくともアンダーグラデエートスクールの哲学の中では、そのような内部対立は起きないはずですが。ところがそういうものが起きて、教育は本来は組織的なものであるはずなのに、研究が個人的なものとして位置づけられているため、なかなか組織的なものにならなかったのです。

そして、最近私が逆に危惧していることは、大学の知は、21世紀の今日において衰退していないか。つまり大学の大衆化になぜ大学は対応できないかというときに、大学の教員自身が大衆化していないのかということです。言い替えると大学が大衆化していくサイクルは、若い先生がいращやるところで恐縮ですが、そこで学んだ学生がまた教員になっていくという連鎖によって、いわゆるリベラルアーツ教育の衰退が加速していつてしまった。絹川先生がおっしゃったように、本来は大綱化はリベラルアーツ教育にとってのチャンスだったのですが、大綱化の結果、大学は一般教育についての十分な自己活性化を行わないまま終わってしまった。そこに、今日なお、大学はなぜ自発性を持ちえないのかという大きな論点があるような気がしています。

レジュメの「はじめに」のところに、京都で行われるということでちょっと遊びの部分を書きました。私の親しい友人に見せたら、「これは新選組ですね」と見抜かれました。明治以来とか、黒船などと書いたのは、日本の歴史上の曲がり角で、本来自らなすべき自発的な改革が黒船来航という他律性によって促されたという類似性を指摘したかったものです。大学の場合、黒船はさしずめ文科省あるいは経済界になるのでしょうか。

次の「大綱化を受けとめた組織のミッション」というところでお話したいことは、私自身はこの大綱化で、基本的にカリキュラム論がきちんと打ち立てられなくてははいけないのではないかと問題提起です。ここでは、私の大学、学部、学科の中でカリキュラムを作るときに、理念を必要とするかしないかという論争があったことをご紹介します。しかし、逆に理念だけが先行している大学は果たしてないのか。これは今の林先生のお話とどこかでシンクロすると思いますが、理念を高々と打ち上げている割に、実際にその理念を具体化するためのカリキュラム論の知的営為は、ほとんどないのではないかと。つまり評価の問題というのは、学生がどう変わりえたのか、要するに学生をこのように育てたいというのであれば、その理念に沿って本当に真剣なカリキュラム論がなくてははいけないはずですが。私の学科では、リベラルアーツを理念の中核にして、何十時間という会議をしてカリキュラムを作り上げました。

その中身についてお話しする時間はありませんが、そのカリキュラムを平成5年に作成して以来、平成15年まで10年間継続してきました。しかし残念ながら、この4月から、私達がある意味では心血を注いで作り上げたカリキュラムが、かなり挫折したものになりつつあります。なぜかと申しますと、最初にこのカリキュラムを作ったときに、法律分野の私と、流通、会計、金融、情報分野のカリキュラム委員5人が核になったのです。あとでお話し致しますが、この委員会の会議には職員がオブザーバーとして入っていました。この5人のうち1人は学部長経験者でしたが、その後、残りの4人のカリキュラム委員が次から次へと学科長になっていきました。3人で6年、そして私が最後に学科長を2期務めましたので4年、合わせて10年です。この10年の間のカリキュラムを支え続けてきた5人の間のカリキュラム論というものは微動だにしないままだったのです。ですから、これまでの10年間はこのカリキュラムを何とか少しでもよくしたいという努力をずっと重ねていきました。その努力の中身についてもレジュメに若干書きました。

ところが、10年目が終わった時、この5人がすべてカリキュラム委員と学科長の役職から解放されてしまったのです。、次の人たちに引き継ごうと思ったときに、それがうまく引き継げなかったのです。つまり、私たちが点から線にしたものが次の世代に面として引き継がれなかったのです。いろいろな人たちにこの10年間努力を傾注したカリキュラム論の意味を唱えてきましたが、私たちが一生懸命蓄積してきた活動は、わずかに周辺に広がっても、学科全体、学部全体に広がりがえなかったのです。残念ながら、そういう不幸な結果でした。

かつて私たちがこのカリキュラムを作ったときには、私たちよりも上の世代と闘いました。その世代は大綱化をすれば、一般教育科目はこれとなくせるのだということを盛んに言われました。それに対して、先ほど絹川先生がおっしゃったように、大綱化はそんなことはいっていないと、ものすごく闘いましたし、私は教授会の席で「おまえは商学部の教員なのか、教養部の教員なのか、どっちなのか」とまで言われたほどでした。しかし、このカリキュラムが崩壊していくプロセスの中で、今度は若い教員に足を引っ張られてしまったというわけです。

私は団塊の世代の人間ですが、上の世代の教員と闘い続けてきたら、今度は若い世代の教員との間であつれきが生

じ、私たちの声が届かなくなっていました。これは一体何だろうとつくづく考えたあげく、私がつどり着いた結論は、結局教師というのは自らが学んだように教育するという事です。なぜ合意できないのか、なぜすき間が埋められないのかと思ったときに、やはりそれぞれの教員の学びの経験に、教育というものは大きく影響されるのです。つまり、学びというものは多様にあるのですが、学んだ経験の相違が大きいということをつくづく痛感しています。

レジュメの2枚めに、私が学部時代から一生懸命読んできた内田義彦氏の『読書と社会科学』という名著を引用しております。内田さんはこの本で次のようなことを言われています。「学問は人間の知恵の輝かしい分身です。そして経験科学は、学問のそのまた分身・輝かしい末子です。それは、もともと人間の知恵の一部として、知恵によって生まれ、知恵で育まれて知恵そのものをいっそう豊かにしながら生長し、それを生み育てた人間の知恵に一人間という存在そのものに一万人欽仰の光彩をそえるはずのものでした。」（同書91頁）ところがそれ（学問）が、「なかでも科学は、じっさいの歴史の上では、とくに、それが発展らしい、顕著な発展を遂げた近代ヨーロッパの歴史に即していえば、生みの親たる人間の知恵とひたすら手を切る形で確立し発展してきました。そして手を切るだけではなく、むしろそれを正面から無視することを科学論によって裏づけされた学者当然の行為としてきました」（同書93頁）。少々長い引用で恐縮ですが、今でもというより今まさに妥当する研究の在り方に対する批判ではないでしょうか。

そして、この箇所は同時に、日本の教育に対する批判にもなっています。日本の教育について、内田氏は次のようなことを言われています。「日本の教育システムでは、成果としての学問の―「能率的」な―伝達に迫られて、一人の―自由を目指す自由な―創造主体としての学問的創造の仕方をじっくり修得するという作業の修練を怠ってきて」（同書99頁）。つまり先ほど絹川先生がおっしゃったことでいえば、訓練という言葉に当て嵌まるのでしょうか。このような学びの訓練というのは、専門教育、一般教育の区別なく、すべての学問、すべての教育に通底する問題であろうと思います。そのことが教師としての大学人に本当に内在化しているならば、教育と研究は一つのサイクルとして動いていくはずであろうと感じています。昔、優れた研究者は優れた教育者でした。しかし、最近の若い研究者たちは、どうも研究技術者になってしまっています。研究という営為自体も、いま一つ、本当に幅広い教養と厳しい現実を見る眼差しというものをバックボーンにして考えているのかと、私の眼から見ると少々寂しくなることがあります。

それから、「職員の役割の再定義」ですが、これもないものねだりで大変恐縮ですが、『大学教育学』という本の中には職員論がありません。教育が対象という意味では、ないことはおかしいことではないかもしれませんが、第8章で「学生支援の歴史」に触れられてあったので、ここにあるのではないかと探したのですが、やはりありませんでした。私たちがやってきたことは非常に異質なことのかもしれませんが、私たちは商学科でカリキュラムを作るときに、職員を徹底的に動員しました。職員の方達との協働作業で作成したといっても過言ではありません。先ほど申しましたように、私たちに対して上の年齢の方達が非常に抵抗されたので、大学の隅の部屋を隠れて使って、職員の方達と連日ディスカッションを繰り返したのです。

つまり、ここで申し上げたいことは、カリキュラムというのは本当に教員だけが作るものかということ、決してそうではない。大学は教員と学生だけではなく、職員というもう一つの大きな構成体があります。この職員の事務という仕事も間接的な教育の仕事なのです。この三者がよいコラボレーションをしないと、大学はうまく動いていかないのではないのでしょうか。そういう意味で、教員のいろいろな議論の中に、職員論というものがなかなか位置づけられないのはなぜなのかという疑問を、私自身は持ち続けています。

この何年か学部を通していろいろな試みをしてきましたが、学科長の二期目は、学長の下で大学戦略を練るという仕事も合わせてさせていただきました。そのときに私が大学の教職員の皆さんにいちばん訴えたのは、熊本学園大学が本当に存在する価値のある大学として社会的に認められているのかということです。つまり、そこで働いている教職員にとってはなくては困るのですが、他にいくらでも選択肢のある受験生にとっては、京都大学のような大学とは違い、私の大学がなくなっても全然困らないのです。しかも、学生を大学に送り込んでいない一般の熊本県民の方達にとっても、熊本学園大学がなくなろうとなくなるまいと全然不都合はないわけです。したがって、受験生や社会の人たちにとって、熊本学園大学という大学が存在する価値があると認めてもらうことが、大学存立の最大の基盤です。そうすると、地域の教育・研究を担う大学の存立基盤としては、うちの大学がなくなったら、皆さんにとって一体何が困るのかということを、社会に対してきちんと説得できなければいけない。そのために、私たちは内なる議論では

なくて、私たちの大学自体が地域社会に対して社会的な公共財としての価値というものをどのようにして勝ち取るのかということを、一つのミッションにしていかななくてはならないということを一生懸命話しました。しかし、そうした提言も、なかなかうまく理解されませんでした。

じつは、熊本県が県民カレッジという社会人の生涯学習の場を作るという話が飛び込んできました。ここをうまく利用して大学の社会的貢献を具体化する絶好の機会にと思い、私たちは本学の学長を通じて熊本大学、熊本県立大学、熊本県に、大学の社会的公共的役割を一緒に担いあうことを呼びかけました。つまり、熊本県にとっても、地方の時代が始まったときに、熊本県がなくなったら困るといわれる県にならなくてはならないわけです。しかも、7年後に博多－熊本間に新幹線が開通します。そうすると、ますます福岡への学生や労働人口の一極集中が進んでいきます。そこまで頑張って、そのプランはかなり詳細な答申書に仕上げて提出しました。県立大や熊大の教員や職員の中でも同じようなことを考えてくれる方達はいたのですが、これもまた、現状では線にも面にもならず終わっています。

最後のページに書きましたように、大学の自発性を組織化をしていくときに、単なる危機感の醸成だけではできないのではないのでしょうか。つまり、組織化をしていくときに、リベラルアーツというのは学生教育だけではなくて、実は教員や職員が自己形成する上でも大きなツールになりえると思います。そのような学びを通して、先ほどからお話ししているミッションを共有化する、組織化するという仕組みを考えなければ、大学というところは自立的な組織にならないのではないかと思います。

21世紀プログラム、その他いろいろなものが出てきますが、これらを他律的なプランとしてではなく本当に内発的なモデルに私たちが変えようとするときに、教員も職員も学生も、学びというものを中核にしていかなないと成功しないのではないかと思います。以上、これまでにお話しさせていただいたいろいろな実例の中から、私が経験したこと、私が考えていることが、皆様とどの程度共有できるかということについて、今日ご議論いただければという思いでお話しさせていただきました。